

声に出して覚える漢字

南無谷窮居堂

目 次

声に出して覚える漢字	-----	4
古典的漢字の覚え方	-----	6
現代風漢字の覚え方	-----	8
ネタ本発見！	-----	10
『小野篁歌字尽』	-----	11
小野篁	-----	13
「巳己巳巳 (いこみき)」の謎	-----	15
白川静	-----	16
小野篁伝説	-----	19
「往来物倶楽部」へ質問	-----	21
『小野篁歌字尽』の原本購入	-----	24
『日本教科書体系・往来篇 七巻』	-----	25
負けた！『歌う生物学』	-----	27
歌って踊れる感じの覚え方	-----	29
『はじめちよろちよろなかぱっぱ』	-----	31
巳己巳の覚え方正解	-----	33
漢字の覚え方一覧	-----	34

南無谷窮居堂のブログ「窮々自適」から、「声に出して覚える」(2013年7月8日～7月26日)の部分をまとめたものです。

<http://kyukyo-do.cocolog-nifty.com/blog/>

声に出して覚える漢字

以前、友人たち相手に書いた「声に出して覚える漢字」を少しずつ修正しながら書いてみます。

『声に出して読みたい日本語』(齋藤孝、草思社、2001)と言う本が評判になったころ、店頭で手にとってみました。要するに「名文集」で、どうしてこんなものが当たるのかよくわからない。その場で声に出して読んでみるところまでやってみたわけではないけれど、特に新しい工夫があるとも思えない。これが当たるなら、柳の下のドジョウ本がいくらでも出てくるだろう、俺にだって作れるぞ、と思いました。

俺にだって作れると言っても、実際に以前からこんな本を作ろうと思っていたわけではないし、思いついたところでわたしの名前で本を出してくれるところはありません。コロンブスの卵で、最初にやった人がえらい。この本以来、日本語本のちょっとしたブームになったから、齋藤孝はえらかった。

『声に出して…』は、日本語をより深く味わうために、美しい日本語のために、声に出して読んでみよう、ということのようですが、この本に収められた文章のいくつかは、わたしも読んだことがあり、調子の良さからなんとなく覚えているものもあります。

歳をとるにつれて記憶力が衰えてきましたが、名文に限らず、若い頃に口調よく覚えた文章や、語呂合わせて覚えた知識は意外に記憶に残っていて、変なところで役立ったりしています。

だから「声に出すこと」が売れたポイントだとすれば、続くブームの中できつと、「声に出して覚える漢字あるいは知識」、というような本が出るにちがいないと推測しました。

「瓜に爪アリ、爪に爪なし(うりにつめあり、つめにつめなし)」で「瓜」と「爪」の漢字の違いを覚える、あるいは「西向きむらい小の月」で大の月、小の月を覚える、というやつです。こんなのもありましたね。

水金地火木土天海冥(すいきんちかもくどてんかimei)
キロキロとヘクト、デカけたメートルがデシをとられてセンチミリミリ
いいくに(1192)作ろう鎌倉幕府

そう推測したのは、わたしの永年の疑問のひとつが解決できるかもしれないという願望があったせいもあります。

それは何かというと、「巳、巳、己」の三つの漢字の覚え方です。わたしはこれを

「すで(巳)半ば、おのれ(己)は いでず、巳(み)は……………」

という文句で覚えました。この「巳は…」の後には当然それなりの文章があったのですが、少し難しかったのか、ちゃんと覚えていないのです。まあ二つだけ覚えておけば、くっついているのが「巳」だからこれでいいやと、若いときにずぼらな覚え方をしてしまったのです。

「すで(巳)半ば、おのれ(己)は いでず、巳(み)はくっついた。」

多少語呂が悪くても、これでいいことにしたのですが、これがいけなかった。人の名前でときどき直巳、直己、克己、博巳なんぞという字を見ると、「さてあの下の句はなんだっけ」と疑問を思い出ししてしまうのです。

だから、「声に出して」ブームなら、どこかでそんな本が出て、疑問が解決できるのではと、本屋の店頭で柳の下のドジョウ本をあれこれのぞいてみましたが、そういう本はいまだに出てきません。年号など受験勉強用の記憶本は今も参考書売場にあるようですが、日本語ブームとはいえ、そんな呪文集みたいな本が売れるわけではないということでしょうか。解答は見つかりません。

そこで、あらためてインターネットで調べてみました。ヤフーで「漢字の覚え方」を検索してみると、大半は小学校の先生や学習塾の先生などの、偏や旁の意味を教えて同じ仲間の字であることを理解させて…などという正統派の教育ページで、わたしの探しているものとはちがいます。しかし、とうとう「巳、巳、己」の出てくるページを見つけました。

フォントハウス(おそらくフォントを作っている会社でしょう)というところのページ (<http://www.apricoweb.ne.jp/museum/fonthouse/tips51.html>) (※07/09/17 現在このページはありません)には、さがしていた「巳・巳・己」について、次のように書いてありました。

巳・巳・己の覚え方

「ミ(巳)は上に、スデニ(巳)半ばと思えども、オノレ(己)は下と思え世の中」

巳・巳・己の読み方

「ミ(巳)シ(巳)は上、ヤ(巳)むイ(巳)はスデ(巳)に半ばなり、

オノレ(己)ツチノ(己)コ(己)キ(己)下につく」

なんと字の形と意味、読み方の違いまで覚えられます。

しかしわたしの記憶とは少し違います。ズバリ正解、疑問氷解とはいかず、「オノレ(己)は下と思え世の中」と人生訓まで加わって、いっそう複雑になって、さらに覚えにくくなってしまいました。うーん。

どなたか、わたしの疑問の下の句をご存じでしたらどうか教えてください。

古典的漢字の覚え方

前回(「声に出して覚える漢字」)で紹介したフォントハウスのページには、「巳、已、己」の他にも次のとおり、漢字の覚え方の表があります。

○壽の書き方

「士(サムライ)が笛(フエ)を吹くフエの長さは一吋」

しかし当用漢字で「寿」に略されたので、特殊な字体にだけ残ります。例:儔・檮

○戊・戌の覚え方

「イヌ(戌)にボウ有り、ボウ(戊)にボウ無し」

○爪・瓜の覚え方

「ツメ(爪)にツメ無く、ウリ(瓜)にツメ有り」

○于・干の覚え方

「ウ(于)カン(干)はね、ぼう」

○亨・享の覚え方

「トオル(亨)は通らず、通るはキョウ(享)」

亨(とおる)は人名漢字、享(キョウ・うける)は常用漢字

○十戎・廿戒の覚え方

「十(じゅう)ジュウ(戎), 廿(にじゅう)カイ(戒)」

○識・職・織・幟の読み方

「言うはシキ(識), 耳シヨク(職)なれば, 糸はオル(織)巾偏こそはハタジルシなれ」

これこそが、わたしが期待していた「声に出して覚える漢字の本」の内容なのですが、さすがにこれだけでは本になりません。

他のホームページからも漢字の覚え方を拾ってみることにします。

いくつかのホームページで言及されていて、この手の漢字の覚え方で、もっともポピュラーなのは、どうやら「戀」と「櫻」のようです。皆さんもご存じでしょう。

「糸し糸しと言う心(いとしいとしというこころ)が戀」

「二貝の女が木にかかる(二階の女が気に掛かる)が櫻」

これは、小学校だか中学校のとき、中年のオヤジ教師から教えられました。どうだ面白いだろうと教えてくれたのですが、旧漢字なのでピンとこなかったからでしょうか、わたしにはちっとも面白くありませんでした。

「努力の努は、女の又に力」

これも昔から伝えられている有名な覚え方です。もう陳腐な感じがしますが、上のふたつと合わせてポピュラー御三家というところでしょうか。

大修館書店のホームページには、この「戀」と「櫻」について、「寅さんの漢字講義」と題するコラムがありました。

先日、寅さんこと渥美清さんの7回忌のニュースが流れました。もうそんなにもなるのかと思われた方も多いのではないのでしょうか。

その寅さんが、漢字に関する講義を披露していたことをご存じでしょうか。

「男はつらいよ」の第1作、妹のさくらのお見合いのシーンです。さくらの名前が戸籍上では「櫻」(=桜)と書くことが話題となったとき、寅さんはこう言います。「この『櫻』って字がね、おもしろうござんしてね。木偏に貝2つでしょ。それに女ですからね。『二階(貝)の女が気(木)にかかる』って、こう読めるんですよ。」これに相手方のお父さんが大感心。図に乗った寅さんは、つづいて「漢字ってのはおもしろうござんすね。」と前置きして、尸(しかばね)の部首に属する字にまつわるちょっとお下品な漢字講義をぶちかましてしまい、一気に株を下げるのですが、そのところは、気になる方はビデオでお楽しみください。

この「二階の女が木にかかる」というのは、「いと(糸)し、いと(糸)し、と言う心」(戀=恋)などとともに、昔は都々逸などにも歌われて、ずいぶんとはやった漢字の覚え方のようです。しかし、「櫻」も「戀」も旧字体。戦後の漢字改革については賛否両論ありますが、新字体を採用したことで、こういう文化が失われてしまったの

は確かかもしれません

。http://www.taishukan.co.jp/item/sinica/maimag_sample.html

昔、わたしが中学生だった頃の小林旭の映画、渡り鳥シリーズの主題歌にも「旭のノーチョサン節」というのがあって「恋という字はヤッコラヤノヤ、分析すればノーチョサン、いとしいとしと言う心」と歌っていたのを思い出す。ここでまた新たな疑問がひとつ。「ノーチョサン」っていったい何だ？「のう千代さん？」

上の寅さんの尸(しかばね)の部首に属する漢字講義というのはわかりますね。尸の中に水または米が入ります。

現代風漢字の覚え方

それは混み合った学食の中で聞こえて来た。

「イトーハムの心ってなんや？工藤。」

「はあ?!」

「イノチはAOPってなんやと思う？黒羽。イノチはライフやんなあ？」

「・・・」

「むつきひーひーどどんがどんってなんやろなあ？」

(中略)

しばらく黙っていた工藤君が口を開いた。

「イチクチソイチイチノメハ」

「はあ？」

「イチクチソイチイチノメハ。は頭ってことだろ。」

「.....それって・・・」

ぴしい。

音を立てて服部君が凍るのがみえた。

「漢字だよ、漢字の覚え方・・・ってのともちよっと違うかもしれないか。

やらなかったか？ガキの頃。どっちかっていうと黒羽の専門分野かな」

「・・・まさか・・・馬の又に入虫が入って『騒』ぐ・・・とか十日十月『朝』が来た・・・とかそーゆーのんじゃ・・・」

「何だ、知ってんじゃない」

他のホームページで、漢字の覚え方がいくつかまとまって出てきたのが、上の例でした。小説のようですが、「漢字の覚え方」という言葉が入っているのでインターネットの検索でヒットしたわけです。

漢字はおわかりでしょうか。整理してみると、
「イトーハムの心」＝「総」の覚え方
「イノチはAOP」＝「命」の覚え方
「むつきひーひーどどんがどん」＝「熊」の覚え方
「イチクチソイチイチノメハ」＝「頭」の覚え方
「馬の又に入虫が『騒』ぐ」＝「騒」の覚え方
「十日十月『朝』が来た」＝「朝」の覚え方
ということです。

「熊」の字は、わたしが小学校のときには「ムツキテンテンヒヒテンテン」と言っていました。「十月十日で朝」というのも記憶にありますね。

この小説らしきもの、わたしの趣味ではありませんが、いったいどういう種類のサイトなのか、階層をさかのぼって見ていくと、

ようこそおいで下さいました
ここは、『名探偵コナン』のFANサイトです
Girls Only ですので、宜しく御了承ください

というページにぶつかりました。オジサンのわたしは、悪いことをしていたわけでもないのにドキッとしてしまい、早々に退散することにしました。このホームページは、「名探偵コナン」のファンサイトで、そこに学園探偵ものらしい小説が掲載されていて、名探偵が暗号の謎を解くと、それは小学生の漢字の覚え方であった、というわけでした。興味のある方は、

http://members.tripod.co.jp/haruki_s/4869/waka1.htm

をどうぞ。(※05/07/07 現在、このページにはアクセスできません。)

その他のホームページでは、単発的な事例ばかりで、あまり収穫はありませんでした。拾い集めたものを紹介します。

「挨拶(あいさつ)」:「むやみにくった」

これは手偏を別にして覚えるわけです。

「愛と恋」:愛は真心、恋は下心

確かに「愛」には真ん中に心があって、「恋」の心は下にあります。しかし「恋は下心」と言ってしまうといいのか、という気がします。

「鬱」:憂鬱の鬱ですが、これは三種類もありました。ひとつはテレビの「伊東家の食卓」で教えていたそうです。

1:林に空き缶 を捨てたら、環境破壊で『凶』で、ヒ〜〜

2:リンカーンはアメリカンコーヒーを三杯飲んだ。

3:きかんじゅう、わっと驚く米屋さんのヒサン

「麗しい(うるわしい)」:鹿がめがね掛けて、私きれい?

「驚く(おどろく)」:ケイマに驚く

小学校のとき、わたしの先生は「馬が敬礼したら驚くじゃろ」と教えてくれました。このふたつは、動物シリーズですね。

「死」:横棒でターッと叩いたらヒーって死ぬ

これこそ現代風で身も蓋もありませんが、小学校低学年には意外にいいかもしれません。

なかなか「瓜に爪アリ、爪に爪なし」のような優雅な覚え方は見つからないものです。

ネタ本発見!

インターネットであれこれ検索しているうち、とうとう「声に出して覚える漢字の本」のネタ本を発見しました。こういう本がどっかにあるんじゃないかと思っていました。やっぱりありました。

それは、『小野篁歌字尽(おののたかむらうたじづくし)』という本です。

日本国語大辞典オフィシャルサイトの「日本のことば遊び」というページに次のように書いてあります。

http://www.nikkoku.net/ezine/asobi/asb02_05.html

江戸初期に作られ後期まで版を重ねた『小野篁歌字尽』という本は、漢字学習のための教科書で、偏や旁の共通する漢字をいくつか並べ、それらをまとめて覚える歌を添えたものです。第一項は、「椿榎楸梧桐」、歌は「はるつばき、なつはえのきに、あきひさぎ、ふゆはひひらぎ、おなじくはきり」というものです。これは同じ偏のものですが、旁が同じものもあります。「汀灯釘町打」

の歌は「水みぎは、火はともしびに、金はくぎ、田はまちなれば、手をうつとよむ」です。

似た漢字の違いを三十一文字の歌にして覚える本という、わたしの探していたものそのものです。前に紹介したフォントハウスのページの、

識・職・織・幟の読み方「言うはシキ(識)、耳シヨク(職)なれば、糸はオル(織)、巾偏こそはハタジルシなれ」

というのは、きっとこのあたりにルーツがあるにちがひありません。

また、『漢字の遊び方』(山本昌弘、講談社現代新書、1985)という本の「漢字を楽しく覚える」という節には、

「栽、裁、戴、載」。なかなか覚えにくいので「木はウエル 衣はタツなり 異なるは イタダクなれば 車ノスなり」と読む。

とありましたが、これも同じ系統のように思われます。

この『漢字の遊び方』という本は、インターネットの漢字好きの人のページでときどき引用されています。それなりに有名な本のようにですが、この「漢字を楽しく覚える」という節には、残念なことに8例しか挙げてありません。しかも、「櫻」、「戀」、「壽」(さむらい(土)のフエ(笛)は一インチ(吋))、「瓜にツメあり、爪にツメなし」、と4例は既知の例でした。

あと4例は、前述の「栽、裁、戴、載」と

「主」:民主の主の字を解剖すれば、王の頭に釘を打つ

「鐵」:金の王なる哉(かねのおうなるかな:「鉄」の旧字)

「巳、己、已」:ミは上に、オノレ、ツチノ下につき、ステニ、ヤム、ノミ中ほどにつく

というもので、「巳、己、已」のまた新しい覚え方が出てきました。これも同じルーツなのでしょうか。

ともかく『小野篁歌字尽』という本を探さなければなりません。

『小野篁歌字尽』

『小野篁歌字尽』をインターネットで検索して調べてみると、『小野篁歌字尽』が「往来物(おうらいもの)」と呼ばれる、主に寺子屋で使用された昔の初歩教科書の一つであることがわかります。「往来物倶楽部」というホーム

ページには、次のような解説がありました。

このように、同じ原理でできた漢字や字形の似通った漢字、また同字を含む熟語や世話字・宛字の類を行毎に二～五字(語)ずつ掲げ、さらに暗誦用の和歌を添えたのが『小野篁歌字尽』で、語彙科往来では最も流布したものの一つでした。

寛文二年(一六六二)一月刊本(京都・近江屋次良右衛門板)がその最古本で、本文冒頭の

椿 榎 楸 柊 桐

春つばき夏はふのきに秋ひさぎ

冬はひらぎ同はきり

のように、行毎に部首が共通する漢字を列挙するのが一般的です(これを仮に「椿」本と読んでおきましょう)。

しかし、『小野篁歌字尽』はその後かなりの板種が見られ、寛文～延宝期に京都で数種が刊行されました。他の出版物同様、その後の出版地は江戸中心となり、江戸中期以降は江戸板が圧倒的となりました。

http://www.bekkoame.ne.jp/ha/a_r/C30.htm

まったく便利な世の中になりました。家の中に座ったままで瞬時にこれらの知識が得られ、さらにこの本の中まで見られるのです。

京都大学附属図書館所蔵 谷村文庫

<http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/tani/1-54.html>

(※05/07/07 現在、このページにはつながりません)

東京学芸大学附属図書館 望月文庫

<http://library.u-gakugei.ac.jp/lbhome/mochi/mochi11.html>

(※05/07/07 現在、このページはありました)

のページでは、いくつものバージョンのページごとの画像を見ることができます。

さて、これで無事わたしの探索は終わったことになるはずでしたが、この画像を見てもわたしには文章が読めないのです。懸案の「巳己巳」のページも見つけましたが、なぜか「巳己巳巳(?)」のように4つも字が並んでいます。(画像参照)覚え方の歌もよく読めません。謎は深まるばかりとなってしまいました。



小野篁

『小野篁歌字尽』の解説は進んでいませんが、もう一つ気になるのは、小野篁本人が書いたわけではないのに、なぜ「漢字の覚え方」が小野篁なのか、ということです。

習字がうまくなる本が「小野道風手習鑑」とか、あるいは「小野小町美顔術」とか、「小野喬の鉄棒練習法」ならわかりますが、小野篁については、たしか百人一首にあったな、くらいの知識しかありません。

そこで小野篁もインターネットで検索してみました。すると同じ小野で、小野小町には及びませんでした。小野道風や小野喬(若い人は知らないか。「小野に鉄棒」といわれた昔の体操選手です。)より小野篁の方がたくさん件の数がでてきました。

とても全部はみられません。少しずつ見ていくといろんなことがわかってきます。

いったいどういう人物だったのかという、ある百人一首のページには、こんなふうに紹介されています。

わたのほら やそしまかてて こぎいでぬと ひとにはつげよ あ
まのつりぶね

~~~~~ 参議篁 ~~~~~ (802-852)

小野篁。

小野妹子の子孫、参議岑守の子。835年、『令義解』の序を書く。838年、遣唐副使として出発するとき、大使藤原常嗣と争い、病と称して乗船せずに隠岐に流された。後に召還されて参議になった。

漢詩は唐の人も激賞したと伝えられるが、現在まで知られているのはわずか。

『宇治拾遺物語』に、嵯峨帝が「子子子子子子子子子子子子子子」をどう読むかとたずねたところ、即座に「猫の子の子猫、獅子の子の子獅子」と答えたという話が載っている。『今昔物語集』には、冥界を自由に行き来した話が載っている。

野相公、野宰相と呼ばれた。

<http://www19.big.or.jp/~floreale/11.htm>

(※05/07/08 現在、このページは見つかりません。)

なるほど小野姓の有名人には小野妹子もいましたね、忘れていました。

冒頭の歌が百人一首に入っている歌で、隠岐に流された時の歌ということです。しかし、それより「子子子子子子子子子子子子子子」ですね。これが読める、というのが漢字の覚え方の先生と関係がある。

もう少し見ていくと、こんな話もありました。

嵯峨天皇にお仕えしていたのですが、その時に「無罪善」という風刺が流れ、それを嵯峨天皇が篁に「よんでみせよ」と命じました。「恐れおおきことが書いてございますゆえに・・・」と篁は嫌がったのですが、天皇がどうしても読めと言うもので、仕方なく「嵯峨無くてよからん」(嵯峨天皇なんて居なくても良い)と読んだところ、嵯峨天皇に「こんな文が書けるのは、今はお前しか居ない。作者は篁、お前であろう」と即座にばれてしまい、怒った天皇に処分されそうになったのですが、そこで篁は「天皇様、今私を切り捨てると言うことは、大切な知識人を失うと言うことになりまますぞ」と開き直り、それではと「この文が解読できたので有れば、お前を無罪放免許してやろう」と「子子子子子子 子子子子子子」と書いた紙を見せました。「子」という字の読み「こ」、「ね」、「し」を即座に当てはめ、「猫の仔子猫、獅子の仔子獅子」(ねこのこ

ねこ、ししのここじし」と読みあて、無罪になったと言われていま  
す。

<http://www.e-oki.net/kankou/study/rekisi/takamura.html>

(※07/10/16 現在、このページは見つかりません。)

なるほど、これなら漢字博士として、江戸時代の漢字教科書の表題に使  
われる資格は十分です

## 「巳己巳巳 (いこみき)」の謎

『小野篁歌字尽』の画像にあった「巳己巳巳」の読み方に、回答をいた  
きました。欣喜雀躍。読んでくださったのは、学生時代の友人の奥さんと、  
書道に堪能で師範級の腕前、だから変体仮名もお手の物ということです。

教えてもらった歌の読み方は、次のとおり。

「巳(すで)」にうえ、「己(おのれ)」はしたにつきにけり、

「己(み)はみなはなれ、「巳(つち)」はみなつく。

しかし、この本はおかしいのではないか、との指摘も一緒にいただきました。  
出だしの「巳」を「すでに」と読み、最後の「巳」を「つち」と振り仮名して  
いるのは間違いじゃないか、ということです。

ちなみに、彼女が学校で習ったという、「巳己巳」の覚え方は、  
「ヤ(巳)む、イ(巳)、中。ミ(巳)は上につく、シ(巳)の声や。

オノレ(己)、ツチノ(己)、キ(己)、コ(己)下につく。」

だそうです。ありがとうございます。また新しい覚え方を知りました。

たしかに、これまで探してきた覚え方でも、

1 「巳、己、巳」:ミは上に、オノレ、ツチノ下につき、ステニ、ヤム、ノミ中  
ほどにつく

2 「ミ(巳)は上に、ステニ(巳)半ばと思えども、オノレ(己)は下と思え世  
の中」

3 「ミ(巳)シ(巳)は上、ヤ(巳)むイ(巳)はステ(巳)に半ばなり、オノレ  
(己)ツチノ(己)コ(己)キ(己)下につく」

と、漢字は三つでした。

それなのにこの本では「巳己巳巳」と文字が四つになっていて、それに  
「いこみき」と、かながふってある。そしてご指摘のとおり、1番目の「巳」を  
「すでに」と読み、次の「己」を「ミ」と読み、3番目の「己」の「おのれ」はいい

としても、4番目の「巳」が「ツチ」と読んでいます。

これがこの本だけなら、間違いとも言えるのですが、他の版本——取り上げている漢字の種類や数が異なるような本を含めて——を見ても、同じように「巳己己巳」の4文字を書いて、同じような読み方をしているように見えます。

江戸時代は用法がちがっていたのでしょうか。四つの文字があったのでしょうか。

もう一度画像をよく見てみると、「巳己己巳」ではなくて、「巳己巳巳」のように見えます。三番目の字、画像では真ん中の横棒と左のLの縦の線は離れています。だから「巳」と見たのですが、「(み)はみなはなれ」と歌にあることからすると、これは上の横棒にも真ん中の横棒にもくっつかない第四の文字なののでしょうか。

またまた謎が謎を呼び、よくわからなくなってきました。

## 白川静

懸案の「巳己己巳」の謎について、大学の同窓生で、大学の先生をしている友人から次のようなメールをもらいました。ありがとうございます。

手元にある白川静著の『字通』をひも解いてみますと、イと読ませるのは、中で離れるやつで、字訓として、「はなはだ、やむ、すでに」とあり、コとキと読ませるやつは、みな離れる字で、字訓は「おのれ、つちのと」です。そしてすべてくつつくやつが、シと読ませ、字訓は「やむ、ああ、み」となっています。これは象形では、蛇の形だそうです。ただし説文解字でも、中で離れるやつで、「やむなり」と読ませ、ついでにすべてくつつくやつで「すでに」とも読ませています。そして、中で離れるやつと、すべてくつつくやつとが、「古くは区別が明らかでない」と注釈されています。金文では区別されていないということです。日本で盛んに使われたのが、説文解字であれば、この本家本元にすでに混乱があるので、江戸期の漢学者の解釈に混乱が生じたのもやむをえないのかなとも思われました。

白川静の『字通』が手元にあるというのはさすが大学の先生ですね。わ

が家にあるのは藤堂明保の『学研漢和辞典』、定価 4,400 円、『字通』は2万円超。ケチな話はおいとして、少し解説をさせていただきます。

白川静について、インターネットに次のような紹介があります。

#### 人物紹介

立命館大学名誉教授。明治43年、福井に生まれる。働きながら夜間の立命館大学専門部国漢科に通う。立命館中学教諭を経た後、立命館大学法文学部漢文学科に入学し、卒業後、同大予科教授となる。29～56年、立命館大学教授を務めた。漢字研究の第一人者として知られ、59年、50年に及ぶ研究成果を盛り込んだ漢字の字源辞典「字統」を刊行、続いて「字訓」を刊行、平成8年には13年半かけて漢和辞典「字通」を刊行、三部作完成させる。他の主著に「金文通釈」(56冊)、「説文新義」(全16巻)、「稿本詩経研究」(全3巻)、「詩経—中国の古代歌謡」「漢字」などがある。

<http://obserai.co.jp/top/works/seisaku/eichi/s.shirakawa.html>

(※05/07/08 現在、このページは見つかりません。)

立花隆は『ぼくが読んだ面白い本・ダメな本 そしてぼくの大量読書術・驚異の速読術』(文藝春秋、2001)にこう書いています。

字を書く人、字を読む人なら、白川静の三部作(いずれも平凡社)、『字統』

(六六〇二円)『字訓』(六六〇二円)『字通』(二万一九〇五円)

のうち、

少くも『字統』の一冊くらいは座右に置いてほしいと思う。漢字の学は、久し

く『説文解字』を最大の典拠とし、二千年近くにわたって、ほとんど進歩らし

い進歩がなかったが、二十世紀に入って、大量の古代甲骨文、金文の資料が出て、それをもとに漢字の歴史が書きかわりつつある。それを最も包括的にやりとげ、中国の学者も驚倒させたのが『字統』である。同書はどの一ページを開いても、驚くほど広くて深い知識がこめられており、碩学とはこのような人をいうために

ある言葉かと讃嘆せざるをえない。(304 頁)

「字を書く人、字を読む人」必携という、べたぼめですね。

そして、『説文解字』というのは、

説文解字 せつもんかいじ

中国最古の字典。▽紀元100年ごろに、後漢の許慎(きょしん)がつくった

。漢字の成り立ちを「象形・指事・会意・形声」の4種に、漢字の使い方を「

転注・仮借」の2種に分けて説明する。この6種を六書という。

(学研学習事典データベース (C)Gakken 1999)

<http://db.gakken.co.jp/jiten/sa/226940.htm>

中国で最も古い漢字の字典ですから、以降の研究者はみなこれを基礎として漢字の研究をしてきたわけで、いわば最古の権威です

ところが許慎の時代には、それ以前の甲骨文字とか青銅器や石碑に刻まれている金石文のことは知られていなかった。だから甲骨文字にまでさかのぼって漢字を研究した白川静によれば、最古の権威であった『説文解字』も、多々誤りがあるということになります。

メールをもらってから、わたしも図書館へ行って『字通』を見てみました。【巳】、【己】、【巳】の三項目を読んだだけですが、【己】の字の解説には「〔設文〕十四下に……とするが、形義ともに無稽の説である。」【巳】の字の解説には「……〔設文〕の説は根拠がない。」とハッキリ書いてありました。無稽というのは荒唐無稽の無稽ですよ。すごいですね。

わたしは、ちょっと著書を読んでみたことがありますが、とても歯が立ちませんでした。背景となる知識がないものですから、読み終えるのがやっついで、その後は、敬して遠ざけております。

それと気になるのは、ネットの中に、わたしの愛読する高島俊男が白川静を認めていないという記事があったことです。高島の先生だった藤堂明保(わたしの漢和辞典の著者)の影響であるということでしたが、このあたり、わたしにはまったくわかりません。

話が長くなってしまいました。白川静によって「古くは巳・己の字の区別が明らかでなく」というのはわかりました。しかし、江戸時代の用例がどうだ

ったのかは、わからないままです。まだまだ勉強しなければなりません。

## 小野篁伝説

さてちょっと話を戻して、再び小野篁です。関係ホームページを見ていくと、いろいろな伝説がある人だということがわかりました。

漢字に関することでは、前に書いた嵯峨天皇が出した謎は「子子子子子子子子子子子子子子」ではなく、

「一伏三仰不來待書暗降雨慕漏寢」

を読めというものだったという話もあるそうです。小野篁はこれを「月夜には來ぬ人待たる搔き曇り雨も降らなん恋ひつつも寢ん」と読んでみせた。

(「一伏三仰」というのは、月夜は「一度伏し、三度仰ぎ見る」ものだから。というものや、そのほかにも、

「二門口月八三 中とほせ」

「木頭切月中破」

などの謎に答えたということです。

「二門口月八三 中とほせ」は、「二門口月八三」の真ん中に線を引けということで、答えは「市中用小斗」、「市中では小斗を用いる＝市(いち)では小さな升(ます)を用いる」となる。

「木頭切月中破」は「木の頭切れて、月の中破る」で、答えは「不用」です。

漢詩の才能が唐の白樂天に匹敵するほどだったという伝説もあります。

やはり嵯峨天皇が、自作の詩として

閉閣只聽朝暮鼓 閣を閉じて只だ聴く 朝暮の鼓

上樓遙望往來船 樓に上りて遙かに望む 往來の船

この二句を小野篁を見せたところ、篁は、「遙」を「空」にして「樓に上りて空しく望む」としたら、もっといいでしょうと言った。

ところがこれは、そのころ渡来したばかりで天皇が秘蔵していた『白氏文集』の「春江」という詩の一部で、「空」を「遙」に変えて、自作の詩だとして見せたものだった。小野篁の詩情は、白樂天(白居易)と同じである、と天皇は驚いた、というものです。

そういえば、この話は、ずっと昔に聞いたことがあります。これが小野篁の話だとは覚えていませんでしたが。

もうこれで、江戸時代の「漢字の覚え方」の先生としての資格は十分ですが、ほかにもいろいろな伝説があったのです。

篁は多情多感な博識の英才で自恃(じじ)するところ高く、直情径行、世俗に妥協せぬ反骨の士であり、野狂の異名がある。

その奇才に因由する数々の話柄が《江談抄》《俊頼口伝》《今昔物語集》《宇治拾遺物語》等に伝えられている。唐の白楽天と詩境を同じくする才幹である

ことを称揚する説話は篁を9世紀の漢風謳歌時代を代表する詩人として理想化する伝承だが、その他隠岐配流事件をめぐる和歌説話、篁を冥官とする蘇生説話などがある。なお異母妹との恋愛談や大臣の娘への求婚談から成る《篁物語》は虚構であり、その成立時期については、諸説があるが、平安中期から鎌倉初期までの間と推定される。

秋山虔

(c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, All rights reserved

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/takamura.html>

この中で、「篁を冥官とする蘇生説話」とは、次のようなものです。

篁は、毎晩冥府に通い、閻魔王庁で裁判を手伝っていた人物としても知られる。篁がまだ学生であったときに、罪を犯した。そのとき、藤原良相(よしみ)が篁のために弁護をした。歳月が流れ、篁は参議となり、良相も大臣になっていた。そのうち良相は重病となり、他界した。直ちに閻魔王の使いの者にかからめ捕らえられて、王宮で罪を定められようとした。見ると、閻魔のかたわらに篁がいる。篁は閻魔に「この大臣は、正直で良い人だ。篁に免じて許してくれないか」と言う。閻魔は「篁がぜひにもと言うのならば、許してやろう」と答える。こうして良相は、生き返った。ある日、良相が内裏に行くと、篁がいた。

あのおりの閻魔王庁でのことを尋ねた。篁は「先年、私のために弁護をしてく

れたお礼をただけ。決して人に話しなさるな」と言う。話を聞いて、良相は

ますます篁を恐れながら、「篁は普通の人間ではない。閻魔王庁の臣であった」と知った。このことは自然と世間に聞こえ、人々は、「篁は閻魔王宮の臣として冥途に通っている人だ」と恐れたという(『今昔物語集』)。(中略)

京都の六波羅蜜寺近くの六道珍皇寺境内の閻魔堂には、閻魔大王と篁の木像が並んでいる。寺の裏には篁が冥界へ通っていたという井戸がある。篁は、この井戸から毎晩閻魔の庁へ出かけ、裁判を手伝っていたのである。そして、嵯峨の清涼寺横の薬師寺境内の井戸(生の六道)から、この世に戻って来たという。

<http://www.pandaemonium.net/menu/devil/ononotak.html>

つまり昼間は朝廷に仕え、夜は閻魔庁に仕えていたという伝説です。忙しい人だったんですね。今なら公務員は「兼業」の届け出をしないとイケません。

そしてこの「冥官伝説」が、小野道風をしのぐ件数の関連ホームページの源となっていたのです。

「陰陽師」安倍清明が、マンガやら小説、映画、テレビでブームになった影響だと推測しますが、安倍清明と同じく、時代オカルトもののヒーローあるいは脇役として有名になっているようです。少女マンガにも出ていのでしょうか、「小野篁サマ秘密の花園」というホームページまであって、これには驚きました。

## 「往来物倶楽部」へ質問

「巳己巳巳」の謎については、もう専門家に聞くしかない、小泉吉永という往来物研究者の「往来物倶楽部」というホームページ

([http://www.bekkoame.ne.jp/ha/a\\_r/indexOurai.htm](http://www.bekkoame.ne.jp/ha/a_r/indexOurai.htm))の掲示板で、質問してみました。

以前『小野篁歌字尽』の概要を紹介したのは、このホームページからの引用でした。「往来物」については、同じく次のような解説があります。

往来物とは、主に寺子屋で使用された初歩教科書の総称です。

中古・中世に作られた往来物(古往来)の多くは、貴族子弟の学習用に編まれた往復書簡(模範文)であり、手紙文の行き来(往来)の意から「〇〇往来」という呼称が一般化しました。近世においては書簡文の体裁をとらない初歩教科書(「実語教・童子教」等の教訓文や「御成敗式目」等の法令文など)を含めて広く「往来物(往来本)」と呼ぶようになりました。

[http://www.bekkoame.ne.jp/ha/a\\_r/A11.htm](http://www.bekkoame.ne.jp/ha/a_r/A11.htm)

わたしの質問は次の二点です。

1『小野篁歌字尽』の活字本というのは存在するのでしょうか。あるとすれば、題名、出版社等をお教えてください。

2『小野篁歌字尽』の中で、「巳己巳」の字が、「巳己己巳」のように4文字に

なっているようですが、これはどういうわけでしょうか。

江戸時代には、4文字として通用していたのでしょうか。

また、「巳」を「すで」あるいは「つち」と読んだり、「己」を「ミ」と読んでいるように見えるのですが、いかがでしょうか。

素人の質問に答えてもらえるかどうか、心配だったのですが、小泉吉永さんからとても丁寧な回答をいただきました。

(1)「小野篁歌字尽」の活字本は、下記のように類書を含めて、「日本教科書大系・往来編」七巻(講談社、昭和四七年)に活字になっています。ただし、解説は私の編著『往来物解題辞典』の方がより新しい資料に基づく正確な記述になっていますので、下記(石川松太郎先生執筆)を参考にしてください。

また、活字版自体の誤植の可能性もありますので、きちんと調べられるのであれば、大空社刊の「往来物大系」一六巻や「稀観往来物集成」一巻をあわせてご覧になるとよろしいと思います。

(2)往来物に限らず江戸時代に流布した本には、文章の一部が異なる色々な異本が生じたり、文章の前後が入れ替わるなどの異同が生じることがあります。「小野篁歌字尽」の場合には次の

(イ)(ロ)の二つの系統に大別できますが、そのいずれもが「巳(\*漢字の第一画と第三画が接触、第二画と第三画は接触せず\*い/すでに)・巳(\*第二画と第三画のみ接触\*こ/おのれ)・巳(\*第三画が第一・二画の両方と接触しない\*み)・巳(\*全ての画が接触し合う\*き/つち)」の4文字になっています。ただし、最後に掲げた(ハ)は「巳(\*全ての画が接触し合い、第一画の横棒が左に突き出る\*い/すでに/おはり/やむ/はなはだ)・巳(\*第二画と第三画のみ接触\*き/おのれ/つちのと)・巳(\*全ての画が接触し合い、第三画の縦棒が上に突き出る\*し/み)」の3文字ですので、これらと同様な異同が生じた結果と思われる。また、漢字の読み方や記載にもしばしば誤記が見られますように、校訂が必ずしも十分ではない写本による伝達が大半をしめていたと思われる江戸時代では、誤記や校訂不足が諸本による異同や混乱の原因になっているものと思います。

(以下、次の三系統の刊本の説明が続きますが、ちょっと長くなるので省略します)

(イ)おののたかむらうたじづくし 小野篁歌字尽(寛文二年板系統)

(ロ)おののたかむらうたじづくし 小野篁歌字尽(延宝三年板系統)

(ハ)たいぜんうたじづくし(小野篁大増補)大全歌字尽

「いやあ、インターネットって素晴らしいですね」と、言いたくなります。大学の先生なら同僚の国文の先生にちょっと聞いてみることもできるのですが、わたしにはそんなつてはありません。それが、いとも簡単に専門家からの回答をもらうことができました。

「巳己巳巳」についての回答は、大学時代の友人の説と同じく、誤記や校訂不足によるものであろうとのことで、4文字通用説は認められないようです。

そうすると、最初に「巳己巳巳」の項を書いた人物が、かなりいい加減で

あったということになります。

さあ次は、活字になっているという「日本教科書大系・往来編」七巻に当たってみなければなりません。

## 『小野篁歌字尽』 原本購入

どうも変なところにはまりこんでしまったようで話が進みません。ドツポにはまってトッピンシャン、というわけで今度はどうとう『小野篁歌字尽』の原本というか、江戸時代の版本を購入してしまいました。



薄汚くて、シミがあるし、綴じ糸はたるんでいるし、いかにもくたびれていてシワがある、しかも小さい。文庫本より一回り大きいくらいで、薄い。なんと厚さ二ミリ。これが五千円。重さを量って見たら16グラム。1グラム312.5円につきます。しかし、目方で本の価値をはかっているはいけません。

弘化二年(1845)和泉屋市兵衛板となっており、以前紹介した、京大図書館谷村文庫の『小野篁歌字尽』と同じ版本のようです。変体仮名の勉強

をしなければいけませんね。

## 『日本教科書大系・往来編 七巻』

往来物倶楽部で教えてもらった『日本教科書大系・往来編 七巻』を、図書館から借りてきました。この教科書大系というのは、往来篇 15 巻、往来篇別巻が2巻、近代編が27巻の全44巻、1冊600ページ前後、古往来から近代の小学校教科書まで、各種の教科書を収録して、それに解説・解題がついているという壮大なものです。大学や図書館でもないとしても買えません。

往来篇七巻にはたしかに『小野篁歌字尽』が活字になって載っています。三系統の刊本が出ているとのことでしたが、もう一つ『訓蒙夷曲歌字尽』をあわせて四種類あります。変体仮名を勉強しなくても読める！

最初の本を見てみましょう。おおむね一行に五つくらいの漢字があつて、一二六行、六六四字が出てきます。

椿 榎 楸 柶 桐

春つばき 夏はゑのきに 秋ひさぎ 冬はひらぎ 同(おなじく)  
はきり

栢 柏 松 杙 檜

百はかや 白きはかしわ 公(きみ)はまつ 久しきはすぎ 會(あふ)  
はひのきよ

柶 榴 桃 李 杏

石留(とむる)ざくろなり 兆(てう)はもも 木に子口(こくち)すも  
もからもも

柳 樽 柿 榎 花

卯(う)はやなぎ 尊(たつき)はたる 市(いち)はかき 木に扨  
(さかずき)はくちなしのはな

このように、木偏の漢字から始まっていきます。しかしこれだけ見ただけ

でも、当用漢字にはなさそうな字や、今は使われていない字や読み方があります。

わたしは楸(ひさぎ)という木を知りません。杓は杉と書きたいし、杏(あんず)と「からもも」が同じ物かどうか分かりません。それに、梶(くちなし)を覚えるために、まず「扨」をさかずきと読むことを覚えなければなりません。

さらに、中にはこんな字がほんとはあるのかよ、と言いたくなるものもあります。木を三つ書いたら森、日を三つ書いて晶(ひかり)はわかります。しかし同じように、火を三つ書いて「ひばな」、水を三つ書いて「ふかし」と読むというのです。往来物倶楽部に画像付きで出ていますからごらんください。

そんなわけで、そのまま「声に出して覚える漢字」として現在使うわけにはいかなそうですが、使えそうなものや、おもしろそうなものをいくつかひろってみました。なんか久しぶりに本題の話になりました。

休 伏 伸 任 件

木はやすむ 犬はふすなり 申(さる)のぶる 壬(みずのえ)まかす  
牛はくだんよ

錢 餞 淺 賤 棧

金はぜに 食(じき)ははなむけ 水あさし 貝はいやしき 木こそ  
かけはし

時 侍 痔 峙(そばだつ) 待

日はときに 人はさふらひ 病はじ 山はそばだつ ■(たたずむ)  
はまつ(注: ■ = 「ぎょうにんべん」を書いて、「たたずむ」と読む)

都 鄙 郡 卻(しりぞく) 邪

者みやこ ■(ひな)いなかなかり 君こほり 谷はしりぞく 牙はよこ  
しま(注: ■ = 鄙の左のへんを書いて「ひな」と読む)

慕 募 暮 墓 墓 幕

水したふ 力はつる 日はくるる 虫ひきがへる 土(と)はか  
巾(きん)まく(注: 「慕」の字の下には、しっかり「水」の字が入  
っています)

申 牛 甲 午 戌 戊

申(さる)牛(うし)は いづるにいでぬ 甲(きのへ)午(むま)

戌(いぬ)にてんあり なきは戌(つちのへ)

巳 己 巳 巳

巳(すでに)かみ 己(おのれ)はしもに つきにけり

巳(み)はみなはなれ 巳(つち)はみなつく

巳己巳巳は、やっぱり巳(い)己(こ)巳(み)巳(き)と読みがながついています。以前、読んでもらった「巳(すで)にうえ、己(おのれ)はしたにつきにけり、己(み)はみなはなれ、巳(つち)はみなつく。」とは、「かみしも」「うえした」の相違はありますが、後は同じで、巳を「すで」、「己」を「ミ」、4番目の「巳」を「ツチ」と読んでいます。この項は、もともといい加減に作ってあったとみえます。

## 負けた！「歌う生物学」

2003年2月21日の朝日新聞に『歌う生物学 必修編』という本の広告がありました。下の写真です。うたい文句は、



「これさえ歌えば高校[生物]はマスターできる」

「新指導要領の項目を網羅した70曲」

「著者みずから歌うCDつき」

負けました。「声に出して覚える漢字」では太刀打ちできません。

いったいどんなものか、これもインターネットで探してみると、紹介と、そのうち何曲かを、ちゃんと試聴できるようになったページがありました。ほんとにインターネットって便利ですね。どうかみなさんも試聴してみてください。

啓林館のホームページ

[http://www.shinko-keirin.co.jp/kori/science/sci\\_index.html#uta](http://www.shinko-keirin.co.jp/kori/science/sci_index.html#uta)

「勇気リンリン アドレナリン」とか、わたしはほとんど抱腹絶倒でしたが、この著者は、大学の講義の時間にまじめな顔をしてこういう歌をうたってきたそうです。(くわしくは本川研究室の次のページでどうぞ。

<http://www.motokawa.bio.titech.ac.jp/song>

これは、ほんとに学生の役にたつんだろうか。

ぜひとも、教員関係の方々の、ご意見をうかがいたいところです。

この本川達雄というのは、なんと、ちょっと前にベストセラーになった『ゾウの時間ネズミの時間』(中公新書)の著者です。

これはおもしろい本でした。わたしも、ところどころ「ほんととかよ」と、眉に唾つけながらですが、楽しく読んだ記憶があります。科学書というより、昔の小松左京のSFを読んでいるような感じでした。

読んでいない人のために、どんな本かを紹介しておきます。

以下は、「千葉大学教員の選んだ 100 冊」というページに載っている紹介です。(ほんとにインターネットは便利です。自分で読み返して紹介するとなると大変ですが、カット&ペーストで、一瞬にできてしまいます。)

動物のサイズが違くと、行動の機敏さや寿命や体内現象が起こる時間が変わってくる。大きな動物ほど何をするにも時間がかかる。食事量、生息密度、行動範囲、運動速度もサイズによって決まってくる。ところが、ゾウもネズミも一

生の中に心臓は約 20 億回打つ。心臓の拍動を時間として考えれば、ゾウもネズミも同じ長さだけ生きて死ぬことになる。動物が変われば時間の流れる速度も変わるのである。本書はサイズの視点から動物をみた生物学入門書ではあるが、人間の理解についても多くの示唆を与えてくれる。著者が述べているように、「人間がおのれのサイズを知る、これは人間にとって、もっとも基本的な教養であろう」。生物のみならず人間についての格好の教養書である

<http://www.ll.chiba-u.ac.jp/100bs/055.html>

これは、実森正子という文学部の教官が書いているようですが、この人は「ほんととかよ」とは思わなかったようです。著者の歌を聴いてkらから読むと、

また違ったかもしれません。

しかし、いまさら「歌って踊れる漢字の本」というわけにはいかないし、この先どうでしょうか。

## 歌って踊れる漢字の覚え方

「歌う生物学」については、高校時代の友人から次のようなメールをもらいました。

この人は、数年前に教育テレビで、ナマコかなんかの講義をしていた人で、お世辞にも歌がうまいとは言えないけれど、何かあれば歌ってみたいになってしまう人種のようにです。私めも分類学上その範疇に属する人間で、(中略)でも、彼の歌を聴いていると、自分が他人にいかにも迷惑をかけていたのかと恥じ入っています。彼自身は本>当に歌うことを楽しんでいるので、まあいいじゃないの、と、これは自己弁護でも>あります。

また、高校の生物の先生をしている大学時代の友人からは、次のようなメールをもらいました。

この先生は、実は前から知っていました。  
なまこの研究で時々テレビにも出てきて、なまこの歌も歌っていました。

歌の視聴をしましたが、生徒には歌を覚える方が普通に内容を覚えるよりも辛い>のではないのでしょうか。それに、歌の内容は高校の基本的な生物の内容で、大学>生に教える内容としてはちょっと幼稚ですね。

でも、ポイントはつかんでいます。もう少し歌いやすい歌にしないとついていけません。彼は、クラシックなどにもとても興味を持っていて、自分自身はどんなタイプの歌にでも対応できますが、生徒はとでも付いていけないような気がします。

この本は是非私も買って、生徒に聞かせてみようと思います。反応を見て、報告致したいと思います。

後日、報告があったらまた紹介したいと思いますが、なまこの歌で有名な先生だったんですね。歌には問題があるようですが、趣向としては、やっぱり「声に出して覚える漢字」が負けていると感じざるをえません。

そこで、対抗するために「歌って踊れる漢字の覚え方」をあれこれ考えてみたんですが、さっぱり思いつきません。

似たようなものといっても、西条秀樹の「YMCA」は漢字じゃないし、ほかに思い出したのは、

大学生のにいさんに

大という字をおそわった

という歌があったことくらいです。どんな曲だったか、うろ覚えなので、インターネットでさがしてみると、ありました。下のページで「大という字」を検索すると、歌詞も曲も確認することができます。

[http://www.mahoroba.ne.jp/~gonbe007/hog/shouka/00\\_songs.html](http://www.mahoroba.ne.jp/~gonbe007/hog/shouka/00_songs.html)

実は、思い出したのはこの歌というより、その昔、江口寿史のマンガ『すめ！パイレーツ』に、この歌を歌いながら「大という字をおそわった」のところで、思いつき両手を広げて、隣の人をひっぱたくというギャグがあったということなのですが、ほかに覚えている人はいるでしょうか。いないでしょうね、きっと。

『小野篁歌字尽』には

水 氷 木 本 大 犬

てんうてば水はこおりよ 木はもとよ 大にてんある犬とよむなり

というのがあります。

だからこれを応用して、ちょっと考えてみました。

「大という字をおそわった」に続けて

大という字に点をつけ、

犬という字もおそわった。

太いという字もおそわった。

一をつけたら天になり、  
頭を出したら、おととつと(=夫のつもり)

うーん、どう考えても受けそうにないですね。それに、そもそもわたしは音痴で、歌えないんです。

「歌って踊れる漢字の覚え方」は前途多難です。

## 『はじめちよろちよろなかぱっば』

こんな本を見つけました。



高柳路子『はじめちよろちよろなかぱっば 七五調で詠む日本語』  
(2003年3月10日、集英社、1400円)

本屋の店頭で、わたしが探していた本がとうとう出たか、と驚きました。帯には「リズムにのって覚えたい日本語たち／ゆたかでおいしいことばが満載／七五調のやさしいコトダマ…」とあり、目次を見てみるとなんと

[実用編・言葉のモバイル]

一 ニカイの下に女あり……字を覚える

「櫻」の字を覚える／「戀」の字を覚える／「松」の字を覚える／

小野篁歌字尽／「叡」の字を覚える／「壽」の字を覚える／「熊」

の字を覚える／「業」の字の筆順を覚える／巳己巳の区別を覚える  
／瓜と爪の区別を覚える

二 せりなずな……暗記はまかせて

と、これはほとんどそのまま。

最初の「櫻」の字を覚えるの箇所を見ると、「木の横のニカイの下に女あり」「十八のニカイの下に女あり」「櫻という字はヤッコラヤノヤ分析すればノウチゴドン二階の女が気にかかる」と、三種類の覚え方が出てきます。

さっそく買って読んでみると、残念ながらいささか期待はずれでした。わたしの期待が大きすぎたのかもしれませんが。

一番残念だったのは、覚え方が出てくる漢字が少ないことです。目次にあがっている字の他にはあまりありません。だから、わたしにはあまり新鮮味がなく、櫻や戀の字はもういいよというところです。

わたしの最大の関心事、巳己巳の区別は

- ・みは上に、おのれ・つちのと下につき、  
すでに、やむ、のみ中ほどにつく
- ・中につくすで(巳)にイの声、下につく  
己(おのれ)キの声、上は巳(ミ)の声
- ・キ・コの声、オノレ・ツチノ下につき、  
イ・スデは中に、シ・ミは皆つく

3種類の覚え方ができました。またバリエーションが増えてしまいました  
が、わたしの疑問(「すでなかなば、おのれはいでず…」という覚え方)は解  
消されません。

それでも、いくつか新知識がありましたので紹介しておきましょう。

「松」:松という字を分析すればキミ(公)とボク(木)との差し向かい

「語 証 誠 調 警」:吾語る正しき証(あかし)誠(まこと)成る  
周(あまね)く調べ敬し警(いまし)む

「明 映 星 晴 曇」:月明かり央(なか)ば映して星生まれ  
青く晴れても雲あれば曇

「叡」: 片仮名のトの字ベキの字※一の谷  
口を目にして作り又なり

※ベキの字=ワかんむり

「業」: たてたてチョンチョンよこチョンチョン  
よこよよこのたてチョンチョン

著者は「歌人、1953 年生まれ」とのことですが、『小野篁歌字尽』の作者は小野篁だと書いているのはちょっといただけません。

## 己己巳の覚え方正解！

「声に出して覚える漢字」のカテゴリーは久しぶりです。昔聞いた「己己巳(すで、おのれ、み)」の覚え方がちゃんと思い出せない、というところからはじめた話([声に出して覚える漢字](#))でしたが、結局正解がわからないまま終わっていました。

それが突然、正解に出会いました。BIGLOBE の「なんでも相談室」です。

己(すで)半ば 己(おのれ)は下に 付きにけり 巳(み)は皆付きて「巳(い)己(き)巳(し)」とぞ読む

<http://soudan1.biglobe.ne.jp/qa1514785.html>

なるほどそうだったのか。わたしは「己(すで)半ば、己(おのれ)は いでず、巳(み)は…」というかたちだと思っていたのですが、これはどうも下の方の、「巳(い)己(き)巳(し)…」をちゃんと覚えられず、自分で変型していたものようです。思い出せないので勝手に縮めて

己(すで)半ば 己(おのれ)は下に 巳(み)は付きぬ

でいいやと思っていたのですが、とうとう正解に巡りあうことができ、長年の疑問が解けました。

こうなったら、あらためてちゃんと覚えることにしましょう。ではもう一度

<sup>すで</sup> 己半ば <sup>おのれ</sup> 己は下に 付きにけり

<sup>み</sup> 巳は皆付きて <sup>い き し</sup> 「巳己巳」とぞ読む

## 漢字の覚え方一覧

以前書いていた「声に出して覚える漢字」は、中途半端なまま終わっています。時々検索フレーズのヒットがあるようなので、中に出てきた漢字の覚え方の一覧表をつけておきます。残念ながら、あまり役に立ちそうなものはありませんね。

|       | 漢字  | 覚え方                      |
|-------|-----|--------------------------|
| あいさつ  | 挨拶  | むやみにくった(※「つくり」の覚え方)      |
| あいとこい | 愛と恋 | 愛は真心、恋は下心                |
| あさ    | 朝   | 十日十月『朝』が来た               |
| あたま   | 頭   | いちくちソいち、いちノめハ            |
| いかり   | 怒   | 女の又(又)に心                 |
| いぬ    | 戌・戌 | イヌ(戌)にボウ有り、ボウ(戌)にボウ無し    |
| いのち   | 命   | 命はAOP                    |
| う・かん  | 于・干 | ウ(于)カン(干)はね、ぼう           |
| うつ 1  | 鬱   | 林に空き缶を捨てたら、環境破壊で『凶』で、ヒ〜〜 |

|       |         |                                                |
|-------|---------|------------------------------------------------|
| うつ 2  | 鬱       | リンカーンはアメリカンコーヒーを三杯飲んだ。                         |
| うつ 3  | 鬱       | きかんじゅう、わっと驚く米屋さんのヒサン                           |
| うるわしい | 麗しい     | 鹿がめがね掛けて、私きれい？                                 |
| おどろく  | 驚く      | ケイマに驚く                                         |
| くま 1  | 熊       | むつきひーひーどどんがどん                                  |
| くま 2  | 熊       | ムつきてんてんヒヒてんてん                                  |
| こい    | 戀       | いとし いとしと いうころ                                  |
| ことぶき  | 壽       | 侍の笛は10寸。(士のフェは一インチ)                            |
| さくら   | 櫻       | 二階の女が気に掛かる(二員の女が木にかかる)                         |
| さわぐ   | 騒ぐ      | 馬の又に虫が入ってさわぐ                                   |
| さい    | 栽・裁・戴・載 | 木はウエル、衣はタツなり、異なるはイタダクなれば車ノスなり。<br>(「戴」の音は「タイ」) |
| し     | 死       | 横棒でターっと叩いたらヒーって死ぬ                              |

|         |         |                                           |
|---------|---------|-------------------------------------------|
| しき・しょく  | 識・職・織・幟 | 言うはシキ(識), 耳シヨク(職)なれば, 糸はオル(織)巾偏こそはハタジルシなれ |
| しゅ      | 主       | 民主の主の字を解剖すれば、王の頭に釘を打つ                     |
| じゅう・かい  | 戎・戒     | 十(じゅう)ジュウ(戎)、廿(にじゅう)カイ(戒)                 |
| すい      | 粹       | 粹人は 米を九十回も かみ                             |
| そう      | 総       | イトーハムの心                                   |
| つめとうり   | 爪と瓜     | 瓜に爪アリ、爪に爪なし(うりにつめあり、つめにつめなし)              |
| つゆ      | 露       | 雨のあと、路ゆく人は露にぬれ                            |
| てつ      | 鐵       | 金の王なる哉(かねのおうなるかな):「鉄」の旧字です。               |
| てら      | 寺       | ドスンとお寺で音がした                               |
| とおる・きょう | 亨・享     | トオル(亨)は通らず、通るはキョウ(享)                      |
| ど       | 努       | 女の又にか                                     |

|                |       |                                                           |
|----------------|-------|-----------------------------------------------------------|
| はな             | 鼻     | 自(おれ)が田は廿(にじゅう)もあると鼻にかけ                                   |
| ほれる            | 惚れる   | 深切な心忽ち人が惚れ                                                |
| み、おのれ、す<br>で 1 | 巳・己・巳 | ミは上に、オノレ、ツチノ下につき、スデニ、ヤム、ノミ中ほどにつく                          |
| み、おのれ、す<br>で 2 | 巳・己・巳 | ミ(巳)は上に、スデニ(巳)半ばと思えども、オノレ(己)は下と思え世の中                      |
| み、おのれ、す<br>で 3 | 巳・己・巳 | ミ(巳)シ(巳)は上、ヤ(巳)むイ(巳)はスデ(巳)に半ばなり、オノレ(己)ツチノ(己)コ(己)キ(己)下につく」 |
| み、おのれ、す<br>で 4 | 巳・己・巳 | スデ(巳)半ば、オノレ(己)は下に付きにけり。ミ(巳)は皆付きて、「イ(巳)キ(己)シ(巳)」とぞ読む       |
| むらさき           | 紫     | 此の糸は紫(このいとはむらさき)                                          |
| らん             | 蘭     | 草葺きに門を構えて西側の向ひに秋の花ぞかをれる                                   |



# 声に出して覚える漢字

ブログ「窮々自適」より

<http://kyukyo-do.cocolog-nifty.com/blog/>

2013年8月15日

南無谷窮居堂

